

学生スポーツの対戦方式に関する研究 九州のバスケットボール競技の変遷と課題

清水信行*, 八板昭仁**

Study of Student Sport Competition Systems Changes in Basketball Competition at Kyushu

Nobuyuki SHIMIZU*, Akihito YAITA**

Abstract

A major change occurred in student sport competitions during 1993. Until that time, the system comprised tournament and league formats. The current system of an exclusively league format was implemented between 1994 and 2010. Presently, a round-robin league format in which the top-ranking teams would play each other twice is under consideration as a new system to take effect from 2011. However, this change would increase the number of games, which would increase the financial burden on teams as well as the number of competition days.

The important objectives from the perspective of sport enhancement are increasing the quality and quantity of competitions. However, only a limited number of sports days can be lost from the school term from the academic viewpoint. In addition, potentially high travel costs for away games would impose a financial burden on students. Thus, due consideration of factors such as the venue of games is necessary.

KEY WORDS : Basketball, Collegiate Athletics, Tournament Format

I. 研究の動機及び目的

学生の球技系競技スポーツの多くは各地区での予選を経て、全国大会の場にて日本一を争う方式をとっている。全国大会の多くは「全日本学生(大学)選手権大会」という名称で位置づけられており、トーナメント戦方式が主流である。それに対して予選にあたる各地区での対戦方式は種目毎に多少の違いは有るもののリーグ戦方式が主流である。バスケットボール競技に関してもリーグ戦方式が採用されている。

対戦方式が異なれば、試合数、大会日数、費用等も変わってくる。試合の質と量はチーム・選手のパフォーマンスに影響を与える。開催地と大会スケジュールは運営費用ならびに各チームの参加

費用に影響する。

2010年4月11日に開催された九州大学バスケットボール連盟常任理事会において、強化を図る為に2011年度からの対戦方式の変更案が可決された。1部リーグは6チームで2回戦総当たりのリーグ戦を行う事を主軸としており、他に入れ替え戦の変更、開催スケジュールの見直し、大会参加費の値上げなどが今後検討される見通しである。

本研究では、福岡から沖縄までの8県を含む九州ブロックでの過去20年間の対戦方式の変遷を調べ、新方式へ向けての課題を明らかにする。

II. 研究方法

以下の資料から過去20年間の大会の対戦方式、

*鹿屋体育大学スポーツ・パフォーマンス系

**九州共立大学スポーツ学部スポーツ学科

開催方法, 開催地を調べ, 今後の課題を整理して, まとめる。

- ・九州学生選手権大会の大会プログラム(1990年度からは業者に印刷, 製本を委託した冊子を有料にて販売。それ以前は学生連盟委員の学生が印刷物を綴じた資料を参加チームならびに大会関係者に配布。)
- ・九州学生バスケットボール連盟理事会議事録(1990年3月~2010年4月)

Ⅲ. 結果

1. 1993年度以前(以下, 「旧方式」)

(1) 対戦方式

この時代は2ステージに分けて大会が組まれていた。

第1ステージは九州を南北の2ブロックに分け, 8月中旬から下旬にかけてトーナメント戦が行われた。北部に属したのは福岡, 長崎, 佐賀, 大分の4県。南部に属したのは鹿児島, 宮崎, 熊本,

沖縄の4県。

第1ステージの結果により上位9チームが第2ステージへと進む。南北それぞれのブロックから第2ステージへ進むチーム数は各年度の参加チーム数に応じて決められた。男女共に北部にチーム数が多いため, 北部5・南部4, あるいは北部6・南部3という割合であった。

第2ステージは10月下旬に開催された。まず初日に3チームずつ3つのグループに分かれてリーグ戦を行う。グループ分けには取り決めがあった。北1位と南3位が同グループ, 北2位と南2位が同グループ, 北3位と南1位が同グループ, 4位以下のチームは抽選であった。図1は北5チーム, 南4チームが出場した場合の組み合わせ例である。初日の三角リーグで2敗して各グループの3位になったチームはその時点で終了という事になる。

大会2日目は各グループでの1位3チームによるリーグ戦, 2位3チームによるリーグ戦を行う(図2)。これでひとまず1位から6位までの順位付けが決定する。この時点で1位と2位になった

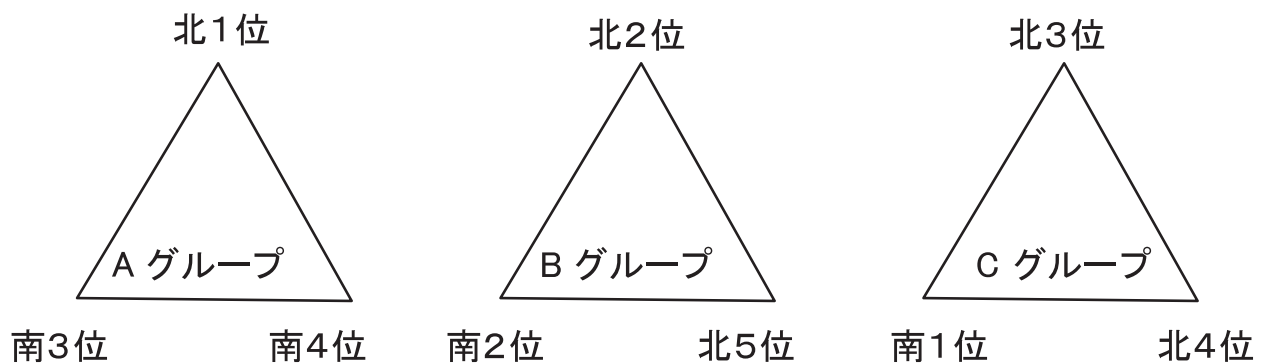


図1 初日の三角リーグ組み合わせ表

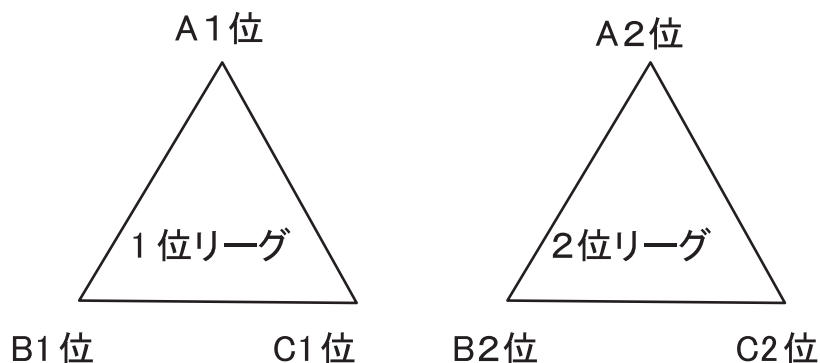


図2 2日目の1位, 2位リーグ組み合わせ表

チームは優勝と準優勝が確定し、同時に全日本学生選手権大会への出場権を獲得した。また、5位と6位になったチームもそれぞれ最終順位が確定し、終了となる。

続いて3日目は3位（1位リーグでの3位）対4位（2位リーグでの1位）による最終の3位決定戦を行う。（図3）

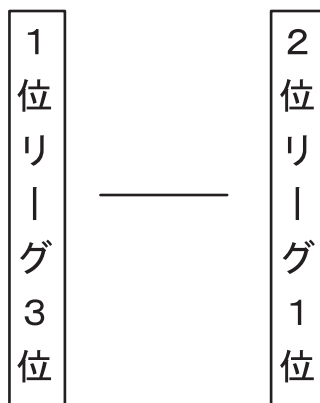


図3 3日目の最終3位決定戦

例年、九州ブロックから全日本学生選手権大会への出場枠が3チームであった為、この3位決定戦は全国大会への最後の出場権をかけた大切な試合であった。

(2) 試合数

1) 上位チームの試合数

南北に分かれての第1ステージ・トーナメントでベスト3、ベスト4ないしはベスト5に入り、第2ステージ初日に三角リーグで1位ないしは2位に入った上位6チームの場合である。第1ステージで3～4試合。第2ステージで三角リーグと順位別リーグで4試合、3位決定戦に出ると更に1試合。合計4～5試合である。両ステージでの試合数を合計すると7試合～9試合である。これが九州代表として全日本学生選手権大会に出場するチームの試合数である。

2) 下位チームの試合数

南北に分かれての第1ステージ・トーナメントで負ければ終わりである。したがって1試合だけで、あるいは2試合だけで終わるチームが大半で

ある。

3) 大会全体の試合数

第1ステージは南北、年度、男女、で参加チーム数が異なる為、試合数も異なる。1990年代初期の頃で北部ブロックは男子が約20チーム、女子が約18チーム。南部ブロックは男子が約10チーム、女子が約8チームである。このチーム数でトーナメント戦を行い、南北共に3位決定戦を、北部の場合は5位決定戦まで行う。典型的な年度の例で北部は男子が23試合、女子が13試合である。南部は男子が10試合、女子が8試合である。

第2ステージは男女共に16試合で3日間である。合計すると男子が49試合、女子が37試合、合わせて86試合である。

この時代と比べると2010年度現在の参加チーム数は男子が6チーム増、女子が2チーム増である。したがって旧方式を2010年度に当てはめた場合、第1ステージ・トーナメントの試合数が僅かに増える。

(3) 大会日数

旧方式では、1チーム1日2試合で組まれていた。

したがって第1ステージのトーナメント戦では北部ブロックが3日間、南部ブロックは2日間である。

第2ステージでは初日に各3グループ3チームでの三角リーグ、2日目に1位リーグと2位リーグ（各グループの3位チームは初日で終わり）、3日目に3位決定戦。したがって3日間である。

第1ステージと第2ステージを合計すると5日間ないしは6日間である。

(4) 開催地

南北別の第1ステージは北部が福岡、南部が熊本、第2ステージは福岡で開催されていた。

(5) 参加チームの宿泊日数

1) 上位チームの場合

両ステージ共に宿泊を伴うチームが参加する場合、第1ステージで2泊または3泊、第2ステージで2泊または3泊を費やす計算になる。最多で合計6泊である。

反対に福岡近辺のチームが参加する場合、第1ステージ、第2ステージ共に宿泊が必要ない日帰り参加である。

2) 下位チームの場合

第1ステージの初日に1回戦ないしは2回戦で敗れたチームの場合である。開催地までの所要時間、ならびに試合終了時間により違いがあるが、多くは1泊での参加である。最小だと日帰り、最多だと沖縄のチームで2泊である。

2. 1994年度～2010年度（以下「現方式」）

(1) 対戦方式

前述の旧方式から現方式への移行期となった1994年度と1995年度は各チームの順位付けをする為に1部8チーム・リーグ、2部4チーム・リーグなど変則的な方式がとられた。しかし変更して3年目の1996年度からは6チームずつでの男子が3部編成、女子が2部編成でのリーグ戦方式が定着した。図4に男子の3部編成での対戦方式を示した。これは参加チーム数が32の年度の例である。

1部の6チームは一次リーグとして1回戦総当たり、各チーム5試合のリーグ戦を行う。次に上位4チームは決勝リーグに臨み、再び1回戦総当たりのリーグ戦を行う。勝敗は一次リーグと決勝リーグを合計した8試合の勝敗数で決める。勝敗数が同じチームが生じた場合は当事者同士の勝敗、次にゴール・アベレージ（得点/失点）で順位を決定する。また、1次リーグ5位、6位の2チームは2部1位、2位と入れ替えリーグを行う。

2部以下のグループも6チームで1回総当たりのリーグ戦を行い、1位～6位までの順位を決める。その後、基本的に1位と2位は上位グループの5位、6位との入れ換えリーグへ進み、5位、6位は下位グループの1位、2位との入れ換えリーグへ進む。

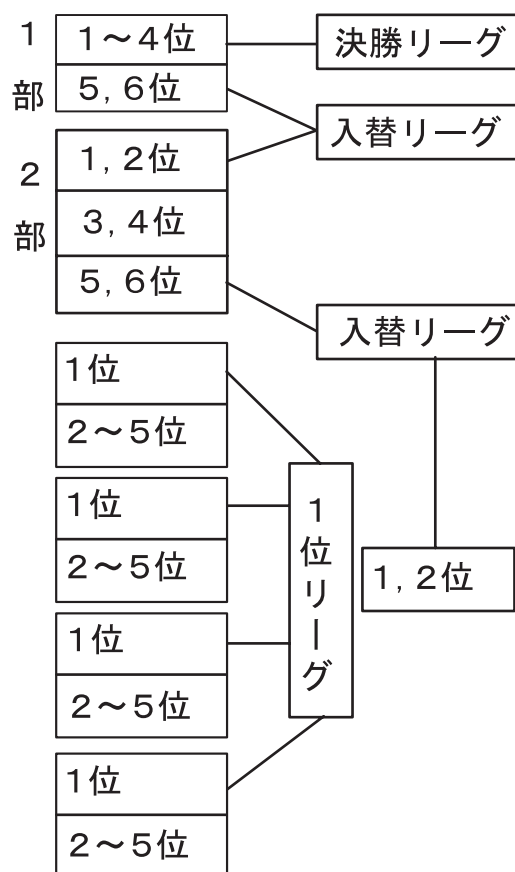


図4 男子3部編成定着期の対戦方式(1996～2005)

3部はチーム数に応じて5～6チームずつの4パートに分けて一次リーグを行い、その後に1位4チームでの1位リーグを行った。

現方式は下部リーグの編成を修正しながら続けられた。2002年度からは女子も3部編成になり、2006年度には男女共に4部編成、2007年度には男子が6部編成、2008年度には女子が5部編成、そして2009年度には女子が再び4部編成へと変更された。図5は2007年度から6部編成になった男子の対戦方式である。

女子の最下部である4部は2ブロックに分かれてリーグ戦を行い、1位同士、2位同士、3位同士、4位同士で順位決定戦を行った。そして1位、2位が3部との入替戦を行った。

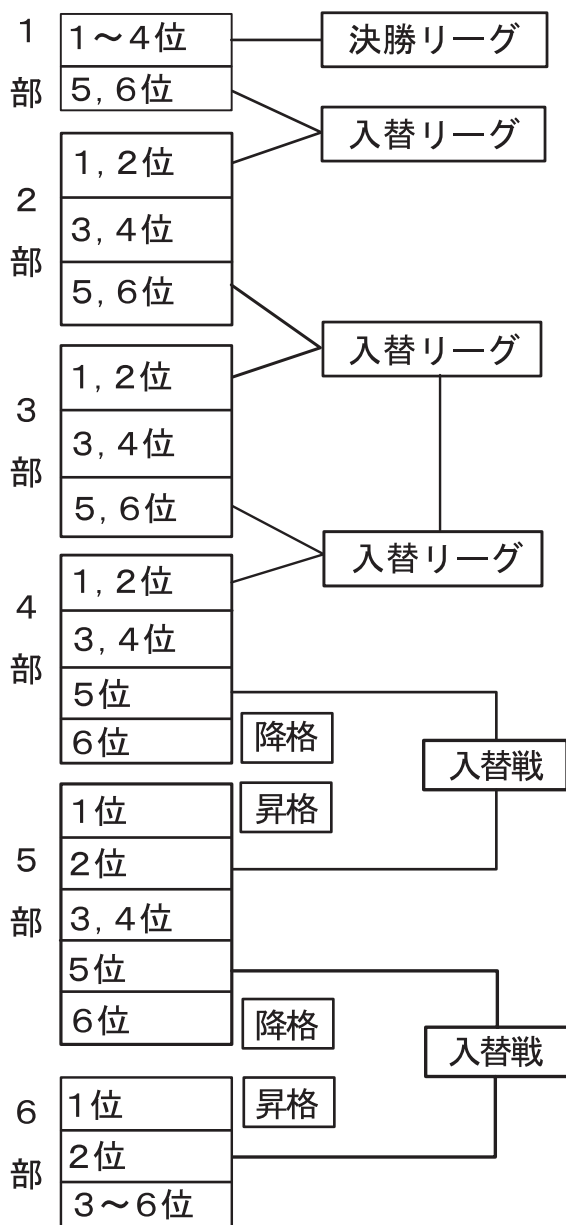


図5 男子6部編成の対戦方式(2007~)

(2) 試合数

1) チーム毎の試合数

1部の上位4チームの場合、1次リーグで5試合、決勝リーグで3試合の合計8試合である。5位、6位は入れ替えリーグが2試合なので1次リーグと併せると7試合である。

2部のチームは入れ替えリーグに進む1位、2位、5位、6位が7試合。入れ替え戦が無い3位、4位が5試合である。

3部以下は前述のように編成方法を複数回変更してきたため、試合数も年度により異なった。男

子の3部編成時代は入替戦の無いチームで5試合、1次リーグ、1位リーグ、入替えリーグの全てに参加したチームで最多の10試合である。6部編成時代では最小で5試合、最多で7試合である。

2) 大会全体の試合数

2009年度の場合、参加チーム数は男子が36、女子が28であった。各グループでの1次リーグ、1部の決勝リーグ、入れ替え戦の合計は男子が104試合、女子が82試合であった。合計すると186試合である。尚、これには下部の全勝チームが全日本学生選手権大会に出場できる機会を残す為のチャレンジ・マッチの試合数は含まない。

(3) 大会日数

1部は各チーム1日1試合を原則に組まれ、3節に分けて行う。1次リーグ5試合を2日間と3日間に分け、第1節、第2節とした。

第3節にあたる上位4チームでの決勝リーグは3試合ずつなので3日間である。これら3節の合計は8日間である。

2部以下も1次リーグ5試合を2日間と3日間に分け、第1節、第2節とした。第3節にあたる入れ替え戦は2試合ずつ2日間である。これら3節の合計は7日間である。

(4) 開催地

男女ともに極力参加チームにとり公平になるよう工夫されてきた。

表1は2010年度の男子の各県別のチーム数である。1部は第1節の2日間は鹿児島県鹿屋市、第2節の3日間は熊本県熊本市、決勝リーグの第3節が福岡県北九州市である。2部は3節を順に福岡（または大分）、熊本、福岡である。3部は同様に沖縄、宮崎、福岡である。4部以下は長崎、福岡、福岡である。

表2は2010年度の女子の各県別のチーム数である。1部は第1節の2日間は鹿屋市、第2節の3日間は福岡市、決勝リーグの第3節が北九州市である。2部は沖縄、福岡、福岡である。3部は沖

縄, 宮崎, 福岡である。4部はすべて福岡である。

表1 2010年度 男子の編成と所属県

男子	1部	2部	3部	4部	5部	6部	合計
福岡	4	2	1	1	3	2	13
佐賀				1			1
長崎		1			1	1	3
大分		1		1	1	1	4
熊本	1	1	1	1		1	5
宮崎			2	1			3
鹿児島	1	1		1	1		4
沖縄			2			1	3
合計	6	6	6	6	6	6	36

表2 2010年度 女子の編成と所属県

女子	1部	2部	3部	4部	合計
福岡	5	2	1	3	11
佐賀			1		1
長崎		1		1	2
大分				2	2
熊本		2	1	1	4
宮崎			1		1
鹿児島	1		1	1	3
沖縄		1	1		2
合計	6	6	6	8	26

(5) 参加チームの宿泊日数

1部のチームが3節ともに宿泊を伴った場合、1次リーグで2泊と3泊、決勝リーグで3泊、合計8泊である。但し男女ともに第1節ないしは第2節の開催地を福岡以外の参加チームの所在地にする工夫をした為、3節全てに宿泊を伴うチームは無い。男子の福岡のチームは第1節の2泊のみで、他は宿泊が必要ない。熊本のチームは第1節と第3節にそれぞれ2泊と3泊で合計5泊である。鹿屋のチームは第2節と第3節にそれぞれ3泊、合計6泊である。

2部以下の場合も同様の工夫をしているが、な

かには3節全てに宿泊を伴うチームもある。例えば男子4部以下の鹿児島、沖縄のチームは長崎、福岡、福岡と全てに宿泊が伴う。また男子3部の場合、沖縄、宮崎、福岡が開催地だが、沖縄の2チームは宮崎と福岡へ合計で2往復しなければならない。また他の4チーム全てが沖縄へ1往復しなければならない。加えて熊本のチームは全てに宿泊が伴う。これは女子の2部、3部においても同様である。

Ⅲ. 考察

(1) 強化の観点から

旧方式と比べて現方式が明らかに勝っている。

まず代表権を獲得して全日本学生選手権大会へ出場する上位のチームの場合を比較してみる。1チームあたりの試合数は旧方式で7～9試合だったのが、現方式では8試合と変わらない。しかし対戦相手が異なる。旧方式では第1ステージのトーナメント戦でも第2ステージ初日の三角リーグでも、実力差のあるチームとの対戦が含まれていた。現方式では1部6チーム、そして更に上位4チームでのリーグ戦なので、実力差が少ない条件での対戦が増えた。

また、旧方式では1日2試合を2日間×2回が典型的だったが、現方式では1日1試合、合計8試合を2日間、3日間、3日間の3節に分けて対戦する事で、試合の質が高まった。

現方式になってから大会での成績が向上したのも事実である。全日本学生選手権大会ではベスト4に男子が1回、女子が3回入った。西日本学生選手権大会でも男子が3回、女子が1回の優勝を果たした。対戦方式の変更だけが要因とは言えないが、強化の面ではプラスになっていると考えられる。

次に下位のチームの場合を比較してみる。旧方式では第1ステージの1、2回戦で破れたチームの場合、試合数は1ないしは2である。現方式では最下部のグループに属していてもリーグ戦であ

るから5試合である。実力差が少ない同士の対戦という点では上位のグループと変わらない。

旧方式では1日だけの参戦だったのが、現方式では1日1試合、合計5試合を3日間、2日間の2節に分けて対戦し、更に入れ替え戦に出場するチームは第3節に行く。短期間に終わってしまっていた旧方式と比べると、1ヶ月前後に渡って質の高い試合ができる事は上位のグループと同条件である。

しかしながら下部のチームにおいては宿泊を伴ってまで大会に参加する事に消極的な場合がある。解決策としては下部のチームのグループ分けを前年度の成績では無く、所在地別にする方法がある。関東男子の6部リーグがこの方式を採用している。それに習って鹿児島・宮崎・熊本ブロック、佐賀・長崎・福岡南部ブロック、大分・福岡北部ブロック、というように近隣同士のチームでリーグ編成をすれば旅費の負担は軽減する。

(2) 大会運営の観点から

旧方式での全試合数は男子49、女子37である。それに対して現方式では男子104、女子82である。合計では86試合だったのが186試合と2.2倍に増加した。旧方式を2010年度の参加チーム数で採用した場合、約90試合であるから、現方式は約2倍の試合数という事になる。

試合数が増加すると使用する会場または日数が増加する。会場によっては借用料がかなり高い場合も有り、経費がかかる。複数の会場で同日に開催するとなれば、運営をする学生連盟の学生委員の人数もそれだけ必要になる。また、必要な審判員数も増加する。審判員には謝礼と旅費がかかる。加えてバスケットボール競技においては審判員の2人制から3人制への移行が始まっている。経費の面からも最も対策を考えなくてはならない問題である。

大会運営にかかる経費は各チーム負担の登録料と大会参加費、プログラムに掲載する広告掲載料、によりまかなわれている。近年は経済的な不況の

為、広告掲載数は大幅に減少している。その為、チーム登録料と大会参加費は何度か値上げがなされてきた。今後は無駄な支出を抑え、チーム負担金をこれ以上値上げしない方向で運営する事が求められる。

また、大会自体の盛り上がりも大事な事である。観客が多く集まり、参加するチーム、選手が鼓舞されより質の高い試合が増える事が大切である。その為には会場の立地、観客席の規模、集客に向けての広報やプログラムの立案も欠かせない。

大会運営に関して2011年度からの新方式で考慮すべき点を整理してみる。

- 1) 会場には参加する各大学の体育館を安価で使用できるように交渉するなど、経費を節約する
- 2) 当日の運営は学生連盟の委員だけに任せるのではなく、会場所在地のチームの学生が責任を持って担当する
- 3) 各チームで積極的に学生の審判養成を行い、実力と資格を獲得させ、学生審判員を多く登用する
- 4) 大会の広報活動を、開催地のチームが中心になって広く行う
- 5) 中高生の大会との同日開催等、プログラムに工夫をする

(3) 参加チームの負担の観点から

旧方式でも現方式でも、福岡在住チームの遠征は多くて2泊を1回等で少ない。それに対して沖縄、鹿児島などに在住するチームの遠征は、3泊4日を2回から3回である。新方式では各チームの宿泊日数が均等になるように開催地を決める事が必要である。2011年度から1部の場合、2回戦総当たり方式への変更が決まった。例えばホーム&アウェイ方式を採用して福岡以外のチームは基本的に5節のうち、3節はホーム・ゲームになるように組む事をルール化する事が大切である。

また、沖縄のチームは空路を使わざるを得ないため、移動費用がかさむ。沖縄のチームが属するグループには例外的対戦方式の採用が必要である。

2010年度現在は沖縄の男女5チーム全てが2部以下に属するので、前述した方式で3節である。一次リーグは6チームで1回戦総当たりの場合、2日間と3日間の2節に分けて開催している。これを変更して沖縄のチームは3日間の節の前日と翌日に更に1試合ずつ組み、1節で5試合が終わるようにする。対戦相手となる2チームは4日間と1日間の2節という事になる。その際の1日だけの試合は日帰りで開催できる同士の対戦とする。2節に分けて休養を挟んで対戦する方がより高いパフォーマンスの発揮と競技力の向上という点では好ましい。しかし九州本土と沖縄を空路にて1往復する費用を考えると検討が必要な問題である。

IV. まとめ

過去20年間の九州学生バスケットボール選手権大会の対戦方式、開催方法、開催地の変遷を調べ、今後に向けて比較、検討した。

強化という観点から対戦方式に改良が加えられ、1993年以前に比べると現在は試合数が約2倍に増加した。それに伴って大会日数と大会経費、旅費も増大した。今後は2011年度から再び大きな改革がなされる方向で検討されている。

上位のチームにとっては旧方式から現方式、そして2011年度からの新方式という対戦方式の改革は強化にプラスであると考えられる。但し、上位のチームのほとんどが福岡県内のチームである為、大会開催地を福岡中心に据えると他県のチームの経済的負担が大きい。ホーム & アウェイ方式の採用を含め、参加チームの負担が公平になるように開催地を決める必要がある。また、沖縄県内のチームに関しては1節、5日間連続で一次リーグができるような配慮が必要である。

次に、下位のチームにとっても旧方式より現方式の方が実力差の少ないチーム同士の対戦が増え、プラスである。しかし大会日数と旅費も増大した。底辺の拡大、ひいては参加チーム数の確保という観点からすると、上位チームと異なるリーグ編成

や大会日程を工夫する事で、学生の経済的負担を抑える事が重要である。

参考文献

- ・関西学生バスケットボール選手権大会公式プログラム（1990年度版～2009年度版）
- ・関西女子学生バスケットボール選手権大会公式プログラム（1990年度版～2009年度版）
- ・関東学生バスケットボール選手権大会公式プログラム（1990年度版～2009年度版）
- ・関東女子学生バスケットボール選手権大会公式プログラム（1990年度版～2009年度版）
- ・九州学生バスケットボール選手権大会公式プログラム（1990年度版～2009年度版）
- ・九州学生バスケットボール連盟理事会議事録（1990年3月～2010年4月）
- ・東海学生バスケットボール選手権大会公式プログラム（1990年度版～2009年度版）